

「また種付けをしてしまったんです。また知らぬオナゴを犯してしまったんです。獣から、はたまた命のないものまでも、全てを犯してしまったんです。誰かが何かを生み出せば、私はまた何かを犯してしまう。

ヤカンや信号機やガードレールや街燈やカラーコーンや水筒やコップ・・・全てが私の性欲のはけ口なんです。

私のこの無意識の種付けを分かってくれるのは、誰一人いやしないんです・・・周りの者たちは、気狂いや最低な変態野郎だと言うけれど、私は、そんなエロスも情欲も、分からないんです。何もかもが分からないんです。気づけば、そこに、果てて犯された何かがあるのです。

・・・こんなに恐ろしいことはないんです。こんなにも・・・先生、私は一体、どうなってしまおうのでしょうか？」

カウンセリングはこれで二回目だ。私は普通のサラリーマン。小汚いサラリーマン。今年で四十になる太った小汚いオジサン。

・・・何故精神カウンセリングを受けているのか。これはつい最近のこと・・・

初めてそれを経験したときは、夢の一部だと思ったんだ。悪夢の破片だと思ったんだ。

自分の娘と同じくらいの、小学生高学年くらいの女の子が、体液塗れの状態で横たわっているんだ。

こんな恐ろしい状況が、ついこの間から日に日に増えてきたんだ。悪夢から覚めても悪夢、戦争から帰還した瞬間に暗殺される、谷底から這い上がった先には広大な砂漠、宇宙旅行から抜け出せない・・・

そんなような、気がどうにかしてしまいそうな、現実で起こることではないような、最悪な状況が続いているんだ。さらに怖いのが、その女の子を見るたびに、股間がいきり立ち、鼓動が高まり、種付けをしたいという本能が刺激されることなんだ。そんな時、決まって私は気持ちが晴れやかになるんだ。手元には、普段吸わない煙草が置かれているんだ。ベッドのランプの傍に、悪酔いを誘発する酒の空き缶が乱立しているんだ。ベッドのシーツには処女膜の剥がれた新鮮な血液が染み付いているんだ。もう、何が何だか・・・私は家族に伝えた。こんなこと隠しては生きていけないと、人生が破綻してしまうと・・・

だから、別れようと。家族でいるのは危険だから、自分の娘に手を出してしまうかもしれないから。いままでの思い出が全て、崩壊してしまうから。最愛の家族を殺してしまうかもしれないからと。私は妻と娘に、年不相応なほどの大量の涙を流し、泣いた。妻も娘も、優しく温かく抱擁して泣いてくれた。こんなにも家族を愛しく離したくないと思ったことはない。愛している、愛している、と妻と何度も言い合った。

パパ、好きだよ、パパ、絶対忘れないよ、と娘は泣きじゃくりながら思いを伝えてくれた。その後、別居という形で生活を変化させていった。ほぼ毎日のように電話をしている。この電話の時間だけが、私にとっての、この私の命を維持させるための安楽と至福なんだ。少年

時代の眠りに着く前の親同士の話し合い、友人との虫取りをするまでの道のり、自転車で駆ける橙色の下町、車の窓の汚れに写る幼い自分、それらを思い出すような安楽と至福なんだ。そんな生活を維持したい、いや、元の生活に戻したい。この奇病を治して妻と娘と、優しく温かい家庭に戻りたい。そんな思いで、この先生に精神的なカウンセリングを設けてもらっているのだ。今回で二回目・・・本当に治るのであろうか。いやいや、治すんだ。今ある力の限りでこの悪夢のような病を治すんだ。妻と娘のためにも。

「・・・また、ですか。やはり、薬でも駄目ですか・・・」

何だか嫌々な感じを醸し出している先生。しかし、それは口調と雰囲気だけである。考え込んだり、何かしらの壁に直面したりと、頭を使うとなると、このようになってしまったのだと初対面の時に語ってくれた。話を重ねていくごとに、本当は柔和で理知のある人間、心に寄り添って、最大限に治療をする、真っ直ぐな人間であると気づいたのだ。そんな先生は私の奇病に眉間を寄せている。幾度も幾度も困難で繊細な精神治療を行ってきた先生でさえも、頭を抱える。そんな奇病に私は立ち向かっているのだ。

「あなたさまは、この奇病の原因が何であるか、想像したことはありませんか？」

「ええ・・・何度も何度も想像しました。しかし、私の想像力がないせいか、どうにも解決に繋がる糸口が見つからず、現状に地団太を踏んでいます・・・」

「ふむん・・・そうですねえ・・・何か、対象物の特徴はありますか？覚えている限りでよいので・・・いや、話したくなければ、話す必要はございませんよ。ここに紙とペンがございます。口に出すことも億劫なこともありますでしょうから。何か、思い出せることがあれば、ぜひとも教えていただきたい。」

「・・・言えることと言えば、対象物が、何かしらのアニメ、漫画、小説のキャラクターのような姿をしているということでしょうか・・・本当に、例えですよ。気持ち悪い例えなのですが、何だか、成人向けの二次創作の作品のような、汚い情欲に包まれた雰囲気にいるような・・・そんな感じがしていたのを覚えています。

現実の人間ではないんです。顎が尖っていて、等身が妙に誘発するように設定されていて、目が大きく、口は小さい、さらには私を煽るような、挑発するようなセリフを吐くんです。そのセリフが極端に下品で現実味のないものなのです。まるで、性の不法投棄、性の肥溜めにされているような・・・普段の私であれば、愛想笑いでその場を乗り切るはずなんです。気づいたときには・・・もう・・・」

私は涙を流した。理解の及ばない現実との乖離が大きすぎて、原因が分からなくて涙が止まらない。

先生は肩を優しく叩く。寝つきの悪い赤子をあやす母のように。その強さは、程よく、かつ勇気を注入してくれているような、前向きな塩梅だった。

急に私の身体が重くなった。先生が手に力を入れている。それは、虫取り少年が大物を捕らえて喜ぶときの力み、愛する者のために何かを成し遂げた時の力み。それに近かった。先生は興奮しながらも私に語った。

「あなたさま！・・・何だか私は、とんでもない想像にたどり着いてしまいましたよ。しかしですね、これから話すことは、とても現実味の無いものです。心が敏感になっているあなたさまにとっては、刺激が強すぎるものでございます。それでもあなたさまは、想像の因果に手を出しますか？・・・そうですか。では・・・

私の想像ですとね・・・この地球に、この世界に、この国に、数多く存在する男。その中でも、あなたさまが、あなたさまが、《種付けおじさん》として選ばれてしまった。という一つの想像です・・・要はですね、あらゆる大人向け文化において、竿を持つ男が《種付け》を行います。竿は誰でもよいのですがね、金髪チャラ男や初心な内気男や中性的な少年などなど・・・その中でも、《種付けおじさん》はマストで使用される人間なのです。身体は体毛で覆われて、股間は無駄に大きく、風呂にも入らないため猛烈な異臭を放つ・・・」

「それに・・・私が選ばれたのですか？」

「ええ・・・全く喜ばしいことではないのですがね。これはあくまでも私の想像。事実とは異なるかもしれません。しかし、この想像が本当なのであれば・・・」

「本当だったら・・・どうなるのでしょうか？」

「国を動かす必要があります」

「は？それは本当ですか・・・？冗談でしょう・・・そんなの。私を慰めるためのジョークなのでしょう！？」

「・・・ジョークであれば、もっと愉快的な話題であなたさまの心を朗らかに致しますが、残念ながらこれはジョークではありません。さらに言えば、国がダメなら人間そのものをコントロールする必要だってあるんです。あなたさまの奇病を解決する糸口は、そこしかないんです」

「は、はは・・・そんな・・・理解したくない。この状況を飲み込みたくない・・・」

何てことだろうか・・・どうしたことだろうか・・・私のこの病は、私だけにあり、これを解決するには国を、もしくは人類全てを操作する必要があると。私は病を治したい、ただそれだけなのに、どうしてこんなにも辛いのだろうか、心と体が重くなるのだろうか。先生の手は汗ばみ、私の肩を濡らした。
先生は続けた。

「・・・この糸口を逃してしまっただけではないんです。あなたさま・・・あなたさまの危機を救うため・・・是非とも、この糸口を手繰り寄せてみてはくさいませんか？」

「いや・・・しかし・・・そんなのありえない！だって、それは、私が二次元に行くようなものなのですよ！」

「・・・その文字通りのことが、本当に起きていたら・・・どうなさいます？」

「どうもしませんよ・・・そんなの！」

「糸口は切れてしまいますよ。この想像を潰してしまっただけは・・・あなたは一生、《種付けおじさん》として。大人向け文化の嫌われ者として操られることになるのですよ。」

「ああ・・・ああ・・・何故・・・私がこのようにことに・・・本当に、本当にそうなのだとした・・・私は」

「・・・しかし、この想像が本当なのか、私には分からない。」

「・・・」

私はこの時、先生の声の高さが普段よりも低くなっているのを耳にした。
それは、私が、思いがけない想像の重さに落胆し、絶望に瀕していることに同情するような・・・
そんなものではなかった。先生が、自身の興奮を抑えるような、沸騰した湯呑みに蓋をかぶせるような・・・
そういったものだった。これから私に降りかかる不幸をさらに助長するような、突拍子で重厚な何か・・・

「そこですね・・・あなたさまに、この画像を見てほしいんですよ・・・」

「へ？画像をですか？別に構いませんが・・・」

「ほら、これなんですがね・・・」

「！！！！？？？？」

「・・・」

「」

「・・・まさかこの三次元から姿を消してしまうとは・・・いやあ、私はね、何かと、人から聞いたことを自分で見て、確かめて、納得しないと物事を進められない質でしてね。少々強引で、非人道的な行為をしてしまいました。さて・・・画像の中には、一人の娘と一人の女・・・そして《種付けおじさん》・・・

フハハハハ！目の前に今までいた、あなたさまが、こんなにも獣のように腰を振り、体液を噴射しているなんて考えられません！！何て面白いのでしょうか！！人間というものは！！フハハハハハ！

あ・・・あれ？この《種付けおじさん》・・・涙を流しながら小娘と淫交をしている。嗚咽をしながら女と淫交をしている・・・まさか・・・まさか！・・・この小娘と女が・・・あなたさまの。《種付けおじさん》の娘さんと奥様だということか！！・・・もし、もしそうだとしたら、この涙にも理由がつく。今までは、この状況に陥ると意識がないとおっしゃっていた。しかし、この《種付けおじさん》には、意識がある！！フハハハハハ！分かったぞ！ついに分かったぞ！あなたさまこそが、本当に《種付けおじさん》そのものだったのです！！・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

あなたさま・・・その画像の中で・・・生きていくことに・・・意識を切り替えてみては？フフフ。

いえ、あなたさまのことを言っているのですよ・・・この声が届けばの話ですがね！！フハハハハハ！

まあ、あなたさまのことでございましょうから、娘と妻のことを思って自分で自分の命を絶とうとするのですが・・・それはそれで、よいのかもしれませんね。元はと言えば、この画像を用意したのは、他にもない私でございますから・・・色々な作者に、色々な作品に、人生を狂わされるその様は、とても見応えのあるものでございます。はあ、久々に笑ったせいか、頬が痛い、脇腹が痛いで大変でございます。

さ、趣味の悪い画像を消して、パソコンを閉じ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・あ、ま、いいでしょう。」

・

・

・

子種が一人で月に腰かけております。

小娘とその母が そんな子種に話しかけます。

「その月に座ってもいいですか？」

子種は快く月に座らせてあげました。

「パパみたいにあったかーい！」

小娘は大喜び。母も笑う。

子種は二人をそのままに

主の精巣へと戻っていく。

「小娘と母を連れてきた。あとは任せた」

精巣の主は 微笑を月に送った。